

St. Luke's International University Repository

Collaboration of Citizens and Professionals to Make a Community Where "All can Live in Peace": Evaluation of a Symposium Focused on Dementia.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-03-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川上, 千春, 梶井, 文子, 杉本, 知子, 矢吹, 和重, 武田, 恵美子, 渡邊, 敏子, 三田村, 文江, 菊池, 憲子, 亀井, 智子, 山田, 艶子, 石山, 稔, 森田, 俊秀, 中浜, 好枝, 作田, 幸子, 牛久, 芳枝 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/1301

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



報告

聖路加看護大学21世紀 COE プログラム第6回国際駅伝シンポジウム

認知症になっても安心して暮らせる街づくり

— 市民との協働によるシンポジウムの評価 —

川上 千春 ¹⁾	亀井 智子 ²⁾	梶井 文子 ²⁾
山田 艶子 ²⁾	杉本 知子 ³⁾	石山 稔 ⁴⁾
矢吹 和重 ⁴⁾	森田 俊秀 ⁴⁾	武田恵美子 ⁴⁾
中浜 好枝 ⁴⁾	渡邊 敏子 ⁴⁾	作田 幸子 ⁴⁾
三田村文江 ⁴⁾	牛久 芳枝 ⁴⁾	菊池 憲子 ⁴⁾

Collaboration of Citizens and Professionals to Make a Community Where “All can Live in Peace” : Evaluation of a Symposium Focused on Dementia

Chiharu KAWAKAMI, RN, MN ¹⁾	Tomoko KAMEI, RN, PHN, PhD ²⁾	Fumiko KAJII, RN, RD, PhD ²⁾
Tsuyako YAMADA, RN ²⁾	Tomoko SUGIMOTO, RN, MS ³⁾	Minoru ISHIYAMA ⁴⁾
Kazushige YABUKI ⁴⁾	Toshihide MORITA ⁴⁾	Emiko TAKEDA ⁴⁾
Yoshie NAKAHAMA ⁴⁾	Toshiko WATANABE ⁴⁾	Sachiko SAKUTA ⁴⁾
Fumie MITAMURA ⁴⁾	Yoshie USHIKU ⁴⁾	Noriko KIKUCHI ⁴⁾

[Abstract]

The 6th International Relay Symposium of the St. Luke's College of Nursing COE brought together members of the community, officials from the local government office, and health professionals to share information about dementia. A Planning Committee with members from the college and the community organized a multi-faceted afternoon program that included formal presentations (medical perspectives on dementia, family caregiving in the US, personal experience as a caregiver in Japan, and local government programs); a concurrent opportunity for consultation with service providers (e. g., visiting nurse station nurses, a dentist and a social welfare official); collaboration to produce a sunflower quilt where each attendee put his/her name on a petal and stitched the petal for inclusion in the flower; and a room staffed by a volunteer community nurse for participants who needed quiet and rest (it was not used).

The symposium was attended by 278 people from the community; the majority of the 83 who responded to the evaluation form were over 50, 60.2% lived in Chuo Ward, and 30.1% were currently caregivers. The evaluations were favorable, and comments expressed appreciation for new information, the understanding of dementia and caregiving that was conveyed, the opportunity to share experiences and ideas, and their sense that the activities of the symposium was 'healing' for caregivers.

It is hoped that the symposium, with its opportunities for key community members to help organize and deliver it and for all attendees to participate actively, represents progress toward developing healthier communities. And, it is hoped that the symposium has contributed to the over-arching goal of promoting citizen-based town planning that would assure each resident, including those with dementia, the possibility to live in peace.

[Key words] community members, collaboration, symposia, family caregiver, dementia

1) 聖路加看護大学 COE 研究員 St. Luke's College of Nursing, COE Research Fellow
 2) 聖路加看護大学 老年看護学 St. Luke's College of Nursing, Gerontological Nursing
 3) 聖路加看護大学大学院博士後期課程 St. Luke's College of Nursing, Graduate School
 4) 第6回国際駅伝シンポジウム区民企画委員会 委員 Planning Committee

〔要 旨〕

中央区という都市部で認知症になっても安心して住み慣れた家で過ごせるよう、区民、町会、サービス提供機関、行政はどうしたらよいか区民とともに考える機会とするために、市民と聖路加看護大学21世紀 COE プログラム日本型高齢者ケアプロジェクトとの協働による第6回国際駅伝シンポジウムを開催した。また、本シンポジウムの企画から実施までのプロセスを、Program Action Logic Model を用いて分析し、シンポジウムを評価した。

本シンポジウムは区民企画委員会を3回開催し、区民企画委員とともに企画内容を議論した。その結果、「認知症の医学的知識」「支援の実際と先進的な例の紹介」「介護の実際」「行政の取り組み」の4つの内容に焦点を絞り、内容に沿うシンポジストを選定した。またシンポジウム開催に向けて、「現在介護されている方が参加できる」「参加された方が短時間でも多くの情報を入力できる」「実際の介護での困難な状況を相談できる」「介護している方を癒す企画を行う」などの要望を本シンポジウムに反映できるよう「ふれあいコーナー」としてサブ会場を開設した。

シンポジウム参加者数は278名であり、スタッフを含めると300名を超えていた。ふれあい高齢者ダイルームの利用者はいなかったが、訪問介護ボランティアを1件派遣した。アンケート回答者は83名（回収率29.9%）で、多くは50歳代から70歳代の女性で占められていた。中央区在住者は50名（60.2%）、現在介護している人は26名（31.3%）であった。

アンケート結果では、本シンポジウムは参加者から高く評価され、特に認知症に対する知識・理解を共有できた場であり、ふれあいコーナーの利用は、家族介護者にとっては癒しの場ともなると評価された。本シンポジウムは認知症に関して区民とともに考える機会ともなり、キーパーソンとなる区民企画委員から波及した区民主導型健康コミュニティが構築されつつあると考えられた。

〔キーワード〕 市民、協働、シンポジウム、家族介護者、認知症

I. はじめに

わが国の総人口は、平成17（2005）年10月1日現在、1億2,776万人で、前年（1億2,778万人：推計人口の遡及補正後）に比べて2万人減少（0.02%）し、戦後では初めてマイナスに転じた。一方、65歳以上の高齢者人口は、過去最高の2,560万人（前年2,488万人）となり、総人口に占める割合（高齢化率）も20.04%（前年19.5%）と、初めて20%を超えた。また、高齢者人口のうち、前期高齢者人口は平成28（2016）年をピークにその後は減少に転ずる一方、後期高齢者人口は増加を続け、平成30（2018）年には前期高齢者人口を上回るものと見込まれており、増加する高齢者数の中で後期高齢者の占める割合は、一層大きなものになるとみられ¹⁾、介護が必要な高齢者は増加すると考えられる。

高齢者介護の中でも、認知症介護は本人の失われていく記憶と混乱に寄り添う介護となり、さまざまな介護サービスや人的見守りが必要であるとされている。しかし、先の見通しがはっきりしないまま家族は日常生活を送ることも多く、家族は生活に支障を生じやすい。2000年に施行された介護保険制度により、中央区では様々なサービスが提供されているが、地域で長期に介護を続けられるようにするためには、専門職によるサービスに加え、区民同士あるいは近隣同士の支えあいによる重層的な支

援が重要である。中央区の調査では、在宅高齢者の37%は「介護サービスなどを利用して自宅で暮らしたい」と希望している²⁾。しかし、個人情報保護法や地域のつながりの希薄化により、特に都市部での地域ケアは難しいものとなっている。

聖路加看護大学21世紀 COE（Center of Excellence）プログラムでは、人々が生涯にわたって、生きてきた経験や知恵に基づいて、必要な医療を納得して選択し、健康資源を上手に活用して、主体的に医療への参画を可能にする、新しい「健康コミュニティ」づくりをめざしている。このような新しい健康づくりについて、市民と医療者が広く意見交換する活動として、国際駅伝シンポジウムを開催している³⁻⁵⁾。そこで今回、中央区という都市部で認知症になっても安心して住み慣れた家で過ごせるよう、区民、町会、サービス提供機関、行政はどうしたらよいか区民とともに考える機会とするために、第6回国際駅伝シンポジウム「認知症になっても安心して暮らせる街づくり—できることから始めよう！ 都市部における認知症介護—」を開催した。本稿では、シンポジウム企画から実施までのプロセスを、Program Action-Logic Model⁶⁾を用いて分析し、シンポジウムの評価をすることを目的とした。

II. 区民企画委員と日本型高齢者ケアプロジェクトの協働によるシンポジウムの企画

1. 区民企画委員の選出

平成17年度に行われた本大学21世紀 COE プログラムの一つである、「転倒骨折予防体操教室」の修了者、町会長、商店主、民生委員からの区民のネットワークと、そこから情報を聞きつけ自ら参加したいと申し出のあった区民など10名を「シンポジウム区民企画委員」として委嘱し、本大学日本型高齢者ケアプロジェクトと区民との協働で本シンポジウムを企画し、開催した。

2. 区民企画委員会と企画内容検討

区民企画委員会は第1回は平成18年4月28日、第2回は平成18年6月23日、第3回は平成18年9月15日に開催された(表1, 写真1-6)。特に第1回目では、「国際駅伝シンポジウムの企画・内容・進め方についての意見交換」に重点を置き議論した。意見交換の内容を内容分析した結果、「認知症の医学的知識」「支援の実際と先進的な例の紹介」「介護の実際」「行政の取り組み」の4つの内容が浮かび上がり、内容に沿うシンポジストを選定した(表2)。また、シンポジウム開催に向けての具体的な方策として、「現在介護されている方が参加できる」「参加された方が短時間でも多くの情報を入手できる」「実際の介護での困難な状況を相談できる」「介護している方を癒す企画を行う」などの区民企画委員の要望を本シンポジウムに反映できるよう企画内容を具体的に立案し、「ふれあい広場」としてサブ会場を開設した。

また、本大学における国際駅伝シンポジウムにおいて第1回より協働しているキルトリーダーズ東京によるキルト制作も参与することになり、シンボルキルトのデザインは、「ひまわり」となった。

3. シンポジウムの概要

1) メイン会場：アリス・C・セントジョンメモリアルホール

シンポジウムを表2のようなプログラム内容で構成した。

2) ふれあい広場：2F ラウンジ

ふれあい広場には専門職者、企業の方々の賛同を得、「展示コーナー」「介護相談コーナー」「キルト制作コーナー」「体力測定コーナー」「休憩コーナー」の5つのコーナーを設置した。「キルト制作コーナー」には、企画委員である民生委員が中央区内の民生委員に呼びかけ、民生委員10名もボランティアで参加した。

3) ふれあい高齢者デイルームと訪問介護ボランティア派遣

介護者にも、シンポジウムに参加していただくために、

表1 区民企画委員会における検討事項

	議 題
第1回	<ul style="list-style-type: none"> ・区民企画委員・日本型高齢者ケアプロジェクトメンバーの自己紹介 ・聖路加看護大学21世紀 COE プログラムと日本型高齢者ケアプロジェクトのこれまでの研究成果について ・国際駅伝シンポジウムの企画意図について ・区民企画委員の委嘱状授与 ・国際駅伝シンポジウムの企画・内容・進め方についての意見交換 ・今後の予定について (パンフレット作成と配布, 宣伝について)
第2回	<ul style="list-style-type: none"> ・新メンバーの紹介 (写真展示, キルトリーダーズ東京, トリトン・アーツ・ネットワーク) ・シンポジウム企画案について ・サブ会場の企画について ・キルトリーダーズ東京より本シンポジウムのキルトデザイン構想について
第3回	<ul style="list-style-type: none"> ・シンポジウムの準備の進捗について ・事前参加申込者の概要について ・当日の運営に関して ・ふれあいコンサートの進行について ・キルトデザインについて

表2 プログラム内容

種 類	演 者	所 属	テ ー マ
基調講演	ルース・キャンベル	前・米国ミシガン大学老年医学センター ターナー高齢者クリニックソーシャル ワーク部長	認知症高齢者と家族の地域ケア
シンポジウム	中野チトセ	横浜市在住	認知症の母を自宅で介護して
	平原佐斗司	東京ふれあい医療生協梶原診療所在宅 サポートセンター長	認知症の正しい理解とかかりつけ医を中心とした 早期診断から終末期ケアの現状
	別宮 圭一	居宅介護支援センターひまわり	認知症高齢者への地域ケアの取り組み
	小倉 草	中央区介護保険課課長	中央区における介護保険事業の推進戦略
ふれあい コンサート	小林厚子 (ソプラノ) 藤原藍子 (ピアノ)	NPO トリトン・アーツ・ネットワー ク (主催) 藤原歌劇団	曲目：・待ちぼうけ ・歌劇「つばめ」よりドレッタの夢 他



写真1 第1回区民企画委員会



写真2 第2回区民企画委員会



写真3 シンポジウム



写真4 ふれあい介護相談コーナー



写真5 シンボルキルト作成



写真6 区民企画委員と参加者による大合唱

ふれあい高齢者ダイルームと訪問介護ボランティア派遣を企画した。

Ⅲ. シンポジウム開催経過

1. シンポジウム参加者背景

事前参加登録者は195名であり、男性28名、女性167名、年齢は20歳から85歳で平均年齢は58.5歳だった。中央区在住者は100名(51.3%)だった。当日の総参加者数は、278名、2Fふれあい広場などの運営スタッフ等も含めると約300名を超える参加人数であった。

83名のアンケート回答者(回収率29.9%)において、

年齢は20-30歳代5名(6%)、40歳代10名(12%)、50歳代23名(27.7%)、60歳代23名(27.7%)、70歳代18名(21.7%)、80歳代以上3名(3.6%)、記載なし1名(1.2%)で、男性12名(14.5%)、女性71名(85.5%)であり、参加者の主な属性は50-70歳代の女性であった。中央区在住の方は50名(60.2%)、中央区外の方は33名(39.8%)であった。現在介護されている方は、26名(31.3%)であった。

アンケート結果(表3)より、「シンポジウムの案内を見た所(複数回答)」では、その他38名(45.8%)が最も多く、「紹介者(複数回答)」は、知人22名(26.5%)であった。「参加目的の理由(複数回答)」は、

表3 参加者のシンポジウム開催情報と参加目的

n=83 (複数回答)

案内をどこ でみたか	町内会 (%)	医療機関 (%)	敬老館 (%)	区役所 (%)	ホームページ (%)	その他 (%)	見なかった (%)
	15名 18.1	7名 8.4	3名 3.6	16名 19.3	3名 3.6	38名 45.8	8名 9.6
シンポジウ ムの紹介	家族 (%)	知人 (%)	町内会 (%)	本学教員 (%)	事業者 (%)	その他 (%)	なかった (%)
	5名 9.6	22名 26.5	10名 12.0	5名 6.0	3名 3.6	19名 22.9	13名 15.7
参加目的	自分・家族の将来 (%)	介護 (%)	知識 (%)	仕事 (%)	その他 (%)		
	30名 36.1	21名 25.3	53名 63.9	16名 19.3	8名 9.6		

表4 シンポジウム参加後における認知症の人に対する今後の行動についての自己評価

項目		人数 (n=83) (%)
知識と理解	大変深まった	17 20.5
	深まった	53 63.9
	あまり深まらなかった	5 6.0
	全く深まらなかった	— —
	未記入	8 9.6
声かけ	積極的にできると思う	16 19.3
	できると思う	49 59.0
	あまりできないと思う	10 12.0
	全くできないと思う	— —
	未記入	8 9.6
支援	積極的にできると思う	11 13.4
	できると思う	52 63.4
	あまりできないと思う	10 12.2
	全くできないと思う	— —
	未記入	10 11.0
区民として の働きかけ	とてもそう思う	8 9.8
	そう思う	58 70.7
	あまり思わない	2 2.4
	全く思わない	— —
	未記入	14 17.1

知識を得たい53名 (63.9%) が最も多かった。

2F ふれあい広場では (複数回答), 展示38名 (29.0%), キルト製作27名 (20.6%), 休憩23名 (17.6%), 体力測定21名 (16.0%) の順に参加・見学した人が最も多かった。

ふれあい介護相談記録から, 各専門職者への相談件数は, 総合相談窓口の看護師に5名, 管理栄養士2名, 看護師1名, 歯科医師6名, 介護福祉士2名, ケアマネジャー1名, 中央区ケアマネジャー3名で, 合計20件の相談件数であった。主に, 中央区のケアマネジャーに相談に来た参加者は, 「認知症であった母を看取ったが, 自分の介護内容は適切であったのか今でも悩んでいること」「現在母を介護しているが主治医と話し合いができない, 診断をしてくれない」「母は家族を家に入れてくれない, でも年相応なのか, 認知症なのか判断がつかない, 病院を変えるべきか」など, その後のフォローが必要であると思われるケースがいた。

ふれあい高齢者デイルームの参加者はなかったが, 訪問介護ボランティアには, 1件の要望があり, ボランティア学生を2名派遣した。

2. シンポジウムの概要

表2のような内容でシンポジウムが行われた。アンケート結果から, 「興味を持った講演者は誰か (複数回答)」の項目では, キャンベル氏39名 (47.6%), 中野氏40名 (48.8%), 平原氏46名 (56.1%), 別宮氏30名 (36.6%), 小倉氏20名 (24.4%) であり, 認知症の知識と理解, 介護の実際, 海外における支援の実際と先進的な例の紹介に興味が高かった。

IV. 評価

1. 参加者からの評価

参加者からのアンケートにおいて, 自由記載から参加者の意見を表5にまとめた。肯定的意見と否定的意見に分けて内容をカテゴリー化した。肯定的意見では, 「介護者への癒し」「認知症について理解をしてほしい」「学びの機会」の3つのカテゴリーとなった。否定的意見では, 「早口で聞き取りづらい」「専門用語の抵抗」「内容が沢山過ぎる」「物理的問題」の3つのカテゴリーができた。

参加者からのアンケートにおいて「認知症の知識と理解」「認知症の人に声をかけられるかどうか」「認知症の人に支援ができるかどうか」「認知症の人に区民として何か働きかけをしたいと思うか」の4点について4段階で質問したところ, 表4のような結果であった。「認知症の知識と理解」では, 80%以上の人が高かったと回答しており, またシンポジストに対する医師の評価も高かったことから, 認知症に対する関心の強さ, および知識と理解の点では有意義なものであったと思われる。

「認知症の人に対する声かけ」では, 約78%の人ができると思うに回答していた。また「認知症の人に対して支援ができるか」においても同様に75%の人ができると思うに回答していた。「認知症の人に区民として何か働きかけをしたいと思うか」では, とてもそう思うは10%ではあったが, そう思うが69.9%を占めていた。

訪問介護ボランティアは1件のみの派遣であったが, 家族介護者からは「このような機会に外に出たくてもなかなかできないので, 学生さんに来ていただいていたうれしかった。また母も喜んで」と評価を受けた。ボランティア学生からも「とても楽しかったのと, 良い経験になった」と学生においても学びの機会となった。

表5 シンポジウムの感想

肯定的意見	介護者への癒し	<ul style="list-style-type: none"> ・必死でこの5年間母を見てきて、走馬灯のように皆様の話を聞きながら思い出し、筋道だつて振り返られました。これからどうしていくべきかも助けてくれる人、場所等が増えることに安心いたしました ・一人で自宅介護しているので、新しい看護情報のイベントは息ぬきをかねて、とてもありがたいです ・お花と絵を拝見させて頂きまして、心になごみました。ありがとうございました ・介護者同士の家族会に私も入っていたことがあり大変力づけられました ・「あなたは賞賛に値する存在です」今日はこの言葉を聞いて嬉しかったです ・昨年11月に亡くなった95歳の父、現在90歳の母を在宅介護して、時間を有効に使うごほうび、楽しみに対しても私は積極的になりました。時間を取ることでできる幸せを感じています ・ふれあいコンサートも大変心がやすらかになり楽しみの一つです ・ふれあいコンサートもとてもよかったです。午後から母にはいつも童謡をうたっています
	認知症について理解してほしい	<ul style="list-style-type: none"> ・一人の人間を、見るのに何人何十人と、居てくれなければならないことを、もっと知ってほしい ・母が発病する前に受講しておいたら、互いにとって少し楽であり、本人にとってつらい恐ろしい思いも避けられたと思う。なので、認知症は皆の病気なのでもっともっと健常者の人に理解してほしい ・介護される、する人たちが、困りの不勉強でつらい思いだけでなくストレスをかかえることを知ってほしい ・かかわっている人たちは、よく勉強し理解してくれるだけでなく広めてください ・今日の内容は、子供（家族）に聞かせたかった（私74歳独居中） ・今回のテーマは身近な問題として関心があった。より良き用意や、準備ができればと思いつつ伺いました
	学びの機会	<ul style="list-style-type: none"> ・今日も、色々な勉強をする事ができて、とても良かったです。ありがとうございました ・また、時間があれば参加したいです ・はじめて参加しましたので特にありませんが、このような有意義な会に参加できてありがとうございます ・県を越えて参加させて頂きました。我市の保健福祉医療・高齢者の福祉の推進会議や実践の参考にさせていただきますので、又参加させてください ・「生き生きネット」月島図書館で手に入れました。これからも読んでいろいろ参考にしたいと思っています
否定的意見	早口で聞き取りづらい	<ul style="list-style-type: none"> ・パンフレットはよくまとまっていたが、これを読むのが早口すぎる ・講演が少々早口で聞きとりづらい部分があり、残念でした ・シンポジストの皆さん早口で解りづらかった
	専門用語の抵抗	<ul style="list-style-type: none"> ・一般の住民の方に専門用語は難しい ・私の不勉強のためか専門的用語に抵抗有
	内容が沢山すぎる	<ul style="list-style-type: none"> ・未来現在をみつめた目標の高い様々なプログラムには感心しますが、今をもっとみつめてできるプログラムを作ってほしい ・出演者が多すぎる ・シンポジウムは盛り沢山過ぎてポイントがぼやけたと思う ・もう少ししばって深く話が聴けたら良かった ・シンポジウムの内容がもりだくさんすぎた ・地域、医療機関、行政、介護者等、色々あったが、キーワードを絞ったほうが良いと思う
	物理的問題	<ul style="list-style-type: none"> ・2Fに行くのに階段は高齢者にはきつい。何か考えては？ ・開催の日時について病院やチャペルとの関わりを考えて保健医療関係者（リタイア者）の参加も考えてはいかがでしょうか ・また資料を入れる手さげなどが用意されているとさらに良かったと思います

これらのことから本シンポジウムは、参加者にとって有意義な機会であり、また区民企画委員が要望していた「認知症の医学的知識」「支援の実際と先進的な例の紹介」「介護の実際」「行政の取り組み」の4つの視点を成し遂げることでできたシンポジウムであったと評価できる。また、専門用語に抵抗があり、内容が盛り沢山で難しかったという否定的な意見もみられていたが、認知症の人に

対する声がけ・支援・働きかけのアンケート結果からは肯定的な回答が得られていた。これらのことは、本シンポジウムは有意義な機会になったとともに、今後の認知症に対する地域での対応を考えていく上で、区民主導型の健康コミュニティが構築されつつあるのではないかと考えられる。

2. 外部評価者からの評価

「シンポジウムは市民のニーズに合ったものだったか」の項目では、「介護経験者に拍手を送る機会を作ったキャンベル氏の講演に感動した。会場内での連帯感と思いを地域に戻っても継続したいと思わせていた」と回答していた。

また、「シンポジウムの開催、ならびに準備段階において、市民の参加や市民との協働は感じられたか」の項目では、「よく準備がされており、市民との一体感が増した」「区民と協働の企画になったのは誠に喜ばしい」「2F ふれあいコーナーが介護者同士でエンパワーする環境になっていた。“ふれあい”が重要である共通理解に達した成果と思う」「ふれあい高齢者ダイルームを用意した点」と回答しており、非常に高い評価を得た。

3. 区民企画委員からの評価

区民企画委員よりシンポジウム終了後に意見を伺ったところ、「区民企画委員として参加できたことを感謝している」「シンポジウムに参加した友人から、認知症という普段の会話からはできないことが、シンポジウムがきっかけとしてさりげなく家族、友人達とも話題にあがることのできるようになったと言われた」「また何かあればぜひ参加したい」などの感想、意見を頂いた。また本シンポジウムをきっかけとして、「研究会を立ち上げたい」「タウンミーティングをやっていききたい」、また「自らが代表となり、行政機関である保健所を会場としたグループ活動をやっていく」など、区民企画委員が区民の自主グループ活動へと進展しつつある。

4. Program Action-Logic Model によるシンポジウムの評価

本シンポジウムにおける Program Action-Logic Model⁹を作成し(図1)、シンポジウムの評価をした。

本シンポジウムにより短期 outcome の「シンポジウムは有意義なものとなったか」「関心・知識・情報を得ることができる」「認知症に関する話題ができる」「住民としてどうしていきたいか考えられる」の点では、ほぼ達成することができたのではないかと考えられる。また Program Action-Logic Model を用いて分析したことにより、中期 outcome に新たに新規事業の創設を加える必要性があると考えられた。今後は長期 outcome 「認知症者を地域で見守ることができる」「若い世代と高齢者世代間の強いつながりが持てる」を目指して中期 outcome を達成すべくプログラムを促進し、本プログラムによる評価をしていくことが示唆された。

V. 総括

本シンポジウムは、中央区民である区民企画委員と本大学日本型高齢者ケアプロジェクトによる国際駅伝シンポジウムを、企画から運営まで協働で開催した。その結果、参加者総数は約300名の盛会となり、高い評価を得た。参加者によるアンケート結果から、区民企画委員が要望していたことはまさに区民が望んでいたことであり、シンポジウムが認知症に対する知識・理解を共有できた場ともなり、家族介護者にとっては癒しの場でもあった。また、シンポジウム参加者から50歳代から70歳代の女性において認知症に対する関心の高さがうかがえ、現段階のこのみではなく、将来的な視野を踏まえた上で、在住している自分の地域をどのように支えていけばよいか見据えている様子がうかがえた。シンポジウム終了後にも、本プロジェクトメンバーと区民企画委員との交流が続いており、新たなプログラムの展開が始められている。さらに本シンポジウムが認知症に関して新たに考える機会ともなり、区民のキーパーソンとなる区民企画委員から波及した区民主導型健康コミュニティが構築されつつあると考えられる。

引用文献

- 1) 平成18年度版 高齢社会白書, <http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2006/zenbun/html/i1110000.html> [2006-06-01].
- 2) 中央区介護保険事業推進委員会 報告書(案), 中央区, 2006年2月.
- 3) 小松浩子, 長江弘子, 太田加代, 横山由美, 有森直子, 川越博美. 聖路加看護大学21世紀 COE プログラム国際駅伝シンポジウム第1報聖路加看護大学21世紀 COE 国際駅伝シンポジウムを貫く People-Centered Care の要素. 聖路加看護学会誌. 9(1), 2005, 76-83.
- 4) 有森直子, 小松浩子, 長江弘子, 太田加代, 横山由美, 川越博美. 聖路加看護大学21世紀 COE プログラム国際駅伝シンポジウム第2報シンポジウム企画・運営を通して明らかとなった People-Centered Care. 聖路加看護学会誌. 9(1), 2005, 84-89.
- 5) 江藤宏美, 堀内成子, 佐居由美, 市川和可子, 梶井文子, 山崎好美, 林亜希子, 梅田麻希, 田代順子. 聖路加看護大学21世紀 COE プログラム第5回国際駅伝シンポジウム知恵と勇気を分かちあう女性たちの経験の中にみる People-Centered Care の構成概念. 聖路加看護学会誌. 10(1), 2006, 68-74.
- 6) Program Development and Evaluation-Logic Model: <http://www.uwex.edu/ces/pdande/evaluation/evallogicmodel.html> [2006-11-23].

